



街をいく私たちは、いつでも一時的な享楽に溺れている。それが違法な薬だろうが、小さなネジ一つであろうが大差はない。私たちは皆中毒者だ。楽しみがないと不安でたまらない。この世に生まれた喜びを、月日が経つあいだにすっかり忘れてしまった気であるのだ。その喜びを思い出せるなら私たちは死を、そして生を、きっと受け入れられるだろう。私はそう信じている。

しかし私はまだ夢見る者に過ぎない。

退屈は自身で乗り越えていかなければならない。誰かが贈ってくれた優しさを種にして自分一人で大切に育てていかなければ、本当の意味で退屈は解消されない。他人に自分の鬱屈した思いを丸投げしてはいけない。退屈は生きている限り次々とやってくるのだから。

寄る辺ないある二月の末のこと。夜中、どうしようもない空虚感に追い立てられ歩き続けた私は、扉が開いていることに気がついたのだった。重く、錆ついて塗装が剥げ落ちた扉の中には、見捨てられた市民プールが黒い雨水に枯葉を乗せて横たわっていた。

家には帰れなかった。帽子をひっくり返して他人の光を乞う女のところになど帰る必要はなかった。自分がまともだと勘違いしている、可哀想な私の母。『つまらない』が口癖で自分一人では何もできない老いた女。私を墮落していると言った人。暗い畳の上に座って何を思うだろう。まだ泣いているだろうか。叫び続けているだろうか、永遠の時間の中で。

グラウンドを囲って鋭く光る夜行性の電灯、更にその周りを寡黙な樹々が見守っている。走る人は居ない。無人のグラウンドの外れには白い塀がある。その中に、あの廃墟となったプールはあった。

私は我が家に近いこの公園に、日頃よく散歩をしにきていた。晴れた日に見るグラウンドは芝生の色と太陽の色に輝いていた。公園一帯は豊かな若葉を身につけた樹々に覆われていた。そしてプールの影に位置する、蔦の絡まる秘密めいた休憩場には、家を捨てた老人が三人ほど暮らしていた。白く塗られた屋根や壺型のベンチと横長のベンチには、いつも陽光が蔦の隙間を通して降り注いでいた。私はそこに座って廃れたプールサイドをいつまでも眺めていた。白い梯子が一つ掛かった楕円形の幼児向けプールと、その向こうに佇む細長い長方形から溢れ出る夕陽を。

その隣で三人の老人たちは、あまりよく聞き取れないくぐもった声で、午下がりの世間話をしていた。彼らの世間話はなぜだか、遠くの国の民謡や舶来品を思わせ、非現実的な印象を私に与えたものだった。

こちら側とプールは、緑色の有りがちな金網で仕切られていた。金網越しに、大きな水たまりはよく映えた。登ろうと思えばできたものの、なんとなくいつも見ているだけで中に入ろうとはしなかった場所であった。

さて、深夜のプールサイドに立って私は空を見た。白みがかかった厚い雲が空を覆って星は姿を隠していた。このような墮落した私にはお似合いの空だと思った。風が強く、私は歯を鳴らして震えていた。プールの水面はどこまでも暗く、何も映さなかった。プールサイドは乾き切ってこのまま朽ちていこうとしていた。私は寒さに耐え切れそうにもなかった。どこか室内に入らなけ

ればならなかった。私は休憩所から、事務室か何かの窓がいつも見えていたのを思い出した。

金網の向こう側の老人たちは静かに眠っていた。私は、大股で二十五メートルのプールをぐるりとなぞり、入ってきた扉の方へ戻った。屋内へ入る扉は、二十五メートルと十五メートルが交わる角のところにあった。

私はドアノブを回した。鍵がかかっていた。どうするか。扉はガラスでできていた。そこで、一旦外に出て手頃な石を探した。石は、この日に在るべくして在った、という風にすぐに見つかった。私の薄汚れた両てのひら分の大きさの石だった。

重い扉を再びそっと閉めて、老人たちを起こさないようにできる限り注意を払いながら、急ぎ足で第二の入り口まで進んだ。うるさくなく済むように扉に上着を掛け、慎重に石で叩いた。三回四回と叩き、ガラスは割れた。思ったより大きく穴が空いてしまった。腕をいれて裏から鍵を開け、扉を開けた。

中はほとんど暗闇に覆われていた。グラウンドから漏れる電燈の明かりも微かにしか届いていなかった。おまけに扉を割ってしまったため凍える寒さは大して変わらなくなってしまった。私はガラスの破片を払って上着を着た。

頼れるのはライターの炎しかなかった。炎は弱々しい橙色で事務室のほんの一部を照らし出した。辛うじて、学校で職員が使うような灰色っぽい机が置かれているのがわかる。机の引き出しを開けたが鉛筆やら古びた書類など、雑多ものしか入っていない。なにか役に立つものは、と床を這ってライターを震える手で何度も着け直し探した。お陰で親指の先を軽く火傷してしまった。机も床も埃だらけで、私の手のひらはざらざらしていた。

しかし幸運なことに、机の下に、脚の車がガラガラ蛇のような音をたてる椅子をどけると、小柄なストーブが置かれていたのである。冬場でも誰かが定期的に見回りに来ていたのだろうか、夏場にしか開かないプールだというのに。

ストーブはカセットボンベで火がつく簡易式のものだった。ライターを片手に脇についているノブを回すとカチリと音がして点火した。ボンベもまだ切れていないとは、私は救われた思いがした。

感覚のなかった手先に生気が蘇ってきた。次に私は乱暴に靴を抜いで足の裏をストーブの明かりに照らした。これまでにない喜びと安堵を感じていた。

私は硬い床に膝を伸ばして座り、壁にもたれてそのまま少しの間眠った。

.....春風の音がして私は目を覚ました。先ず割れたガラス扉から入り込む厳しい冷気に、そして部屋の中がいくぶん明るくなっていることに気がついた。いつの間にか私は横になって眠っていた。ストーブの炎は既に消えて、窓から見える密集した雲は急激に白んできていた。事務室にはまだわずかに暖かさが残っていた。とても静かな朝だった。外はかなり冷え込んでいるに違いないと私は起き上がった。母の元に戻る時間だ。

私は転がしたままだった靴を履いて、打ち捨てられた机に別れを告げた。ドアノブを回し、再び厳しい冬の中に戻っていった。けれども私は次の瞬間には、進むことも戻ることもできずに立ち尽くしていた。ただ呆然と、案山子のように。

プールサイドは真っ白に光り輝いていた。長い夜を耐えのびた憂鬱な顔を、朝の息吹とともに

吹き払いながら。私の吐く息は湯気となって顔の辺りを浮遊している。雪が降ったのだ。私が眠ったあの瞬間に。

枯葉ばかりの溜まり水に足を下ろす、梯子のか細い手すりにさえ、器用な妖精たちは降り積もっていた。金網の果てしない数のひし形にも。

雪は、心ない数多くの人々のように、一夜だけの寢床から出てきた私の仕草や考えを非難しなかった。全く些細なことだと。彼女らは優しく言葉でない言葉を私に語りかけた。妖精たちは私の元に飛んでくると頬に唇を寄せた。

扉の外に置き去りにした凡夫な石は、雪の下に埋れかけて今や重い瞼を閉じようとしていた。

明け方の若々しい豊かな雪は、私に至上の笑顔を投げかけていた。私は雪をそっとすくい上げた。妖精たちは愉快的笑い声をあげるとたちまち液体となって、指の間から落下していった。早々と今日の役目を終えようとしている暁の彼方からは小さな詩が聴こえてくる。私の目には見えない微細な隙間から、氷の結晶が手を振って挨拶をした。それは光であった。瞬きの連鎖であった。未熟な私への、何も見えていなかった私への。狭苦しい部屋の扉を叩く音であった。私は優しさの種を見つけたのだ。忘れられた市民プールで。私は雪が花開く瞬間を目撃したのだ。

この都会にはもうすぐ春がくるだろう。明日にでも。私は手のひらで溶けゆく雪を靴の下で固まる雪たちを誰かに伝えなければならない。種を私の胸の中でしっかりと温め、適度な水を与え、発芽させなければならない。やがて一つの芽は、幹はまだ頼りなくとも立派な一本の木に育つだろう。そしていつの日かは、丈夫な枝をしならせ、果実を落とし、その中から最初に生まれた種を、畳に伏しているあの愛する人にも分け与えてやろう。

明け方、老人たちはまだ目を覚まさない。鼻を赤くして眠っている。私は足音を忍ばせ、詩人たちの密かな王国の扉を閉めた。何者にも穢されない、強靱で豊かな喜びを贈ってくれた彼らに感謝の言葉を囁いて。

それからまもなくして、この日二度目の雪が降り出したのだった。街は無音の子守唄に埋め尽くされて、長い眠りから覚めようとしていた。

いとぐち

<http://p.booklog.jp/book/84071>

著者：大きな水

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ookinamizu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84071>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84071>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ